

2023年4月16日（日）トマスの主日朝礼拝説教

『手と脇腹の傷』井上隆晶牧師

エゼキエル書 37 章 11～14 節、ヨハネ福音書 20 章 19～29 節

### ①【あなたがたに平和があるように】

イエス様が復活した日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけ、身を隠していました。イエス様の次は自分たちが殺されると思っていたからです。そんな恐れと不安でいっぱいだった彼らの家の中にイエス様は入って来られ、真ん中に立ち「あなたがたに平和があるように」と言われました。(19 節)そして彼らに手と脇腹の傷跡を見せ、自分がイエス本人であることを示すと、弟子たちはイエス様を見て喜びました。イエス様は再び「あなたがたに平和があるように」と言われました。(21 節)この「あなたがたに平和があるように」という言葉は、キリスト教の礼拝の中で何度も用いられる「挨拶の言葉」です。正教会では「衆人に平安」と司祭がいうと、会衆は「汝の霊にも」と応えます。ですから私にはこの場面が、礼拝の場面に見えてくるのです。

弟子たちだけでなく、私たちも病気や戦争や人間関係のことで心が動揺し、恐れることがあります。でも礼拝を始めると不思議と心が平安になるのです。私は祈禱をしている時に一番平和を感じます。それは心の中にキリストが入って来られるからだと思います。キリストが完全な平和です。キリストの平和は、この世の平和とは違います。イエス様は死ぬ前に「私は、平和をあなたがたに残し、私の平和を与える。私はこれを世が与えるように与えるのではない。」(ヨハネ 14:27)と言われました。この世の平和は、お金がたくさんあることから来る安心、健康から来る安心、災害や戦争や争いが無いことから来る安心です。全部横から来る平和であり、その平和は一瞬の内にひっくり返されます。この世には完全な平和はないからです。しかしキリストが下さる平和はこのようなものとは違います。それは上から来る平和であり、聖霊による平和であり、死を前にしても恐れぬ平和です。平安の秘訣は、心の中に天の者、キリストがいるかどうかです。

### ②【聖霊を受けることは、キリストの仕事を引き継ぐため】

イエス様はこの後「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」(21 節)といわれ、弟子たちに息を吹きかけ「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」(22～23 節)と言われました。これはヨハネ福音書のペンテコステ（聖霊降臨）と言われている記事です。天地創造の始め、神様は人間の鼻に命の息を吹き入れられましたが、ここでは弟子たちはキリストによって命の息である聖霊を吹き入れられ、キリストの体（教会共同体）に創り変えられたのです。聖霊という油を注がれた者は、キリストになります。私たち

も小さなキリストなのです。それはイエス様の業を引き継ぐ者としてこの世に派遣されるためです。その仕事の一つが人の罪を解くことです。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でもあなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」と言われています。よく福音派の人は「信じたら救われ、信じないと地獄に行きます」といいます。しかしここでは「あなたがたが赦せば、その罪は赦される」と言われています。相手の問題ではなく、あなたの問題なのです。「赦せ」と教会に命じているのです。ステファノと同じように自分を迫害する者のために祈るのです。人の赦しはあなたにかかっています。教会は、神と多くの民を結ぶ新しい祭司、新しいエルサレムとなったのです。

### ③【命であるキリストとの交わりによって信仰は生まれる】

弟子の一人であるトマスは、弟子たちと一緒にいなかったのでイエス様に会うことができませんでした。仲間の弟子たちが「私たちは主を見た」（25 節）といった時、彼は「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手を脇腹に入れてみなければ、私は決して信じない」（25 節）と言いました。トマスにはディディモ（双子）というあだ名がついています。それは彼の心の中にいる二人の自分「信じる自分」と「信じられない自分」を意味しています。これは私たちも同じ、いつも 100%信じている人は誰もいません。ですからトマスとはあなたです。信仰は日々、海の波のように変化し、人間の気分に左右されます。ではどうしたらよいのでしょうか。

八日の後（日曜日のこと）、弟子たちはまた家の中におりトマスも共にいました。すると再びイエス様は姿を現し、トマスに「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」（ヨハネ 20：27）と言われました。トマスはすぐに「私の主、私の神よ」（同 20：28）とすばらしい信仰告白をしました。信じるためには神からの働きかけがまず必要です。イエス様が八日の後に現れてくれなければ、トマスは信じられなかったでしょう。しかし、そのイエス様の脇腹に深く私たちが手を伸ばさなければ、また私たちの指をキリストの傷口に当てなければ信仰は生まれません。傷口に指を当てる（触れる）とは、キリストの十字架は私と関係があると受け入れることです。その傷は、私たちの罪と過ちを思い出させます。電気器具はコンセントとつながらなければ動きません。信仰も同じで、あなたがキリストとつながらなければ、信仰は入って来ないのです。イエス様はいつもあなたを待っておられます。特に八日目である日曜日は共におられます。後は、あなたが手を伸ばすだけです。

●石川克巳というクリスチャンの医師がいます。国立療養所で重症心身障害児病棟で小児科医として障害児のケアに従事してこられました。彼はこういいます。「障害児のいのちは輝いており、最も生き生きとした豊かな人格を持つ者だと、

心ある医師や、職員、家族はとらえている。重症児の場合には、実際そうであるが、本人とその家族が周りの人たちに囲まれて、そこに一つの命が生きている。そのこと自体が命と言える。周囲の人が、それがたとえ一人であっても、その重症児とのつながりを大事にしようとする限りは、まさに命である。」

私たちは命というと、肉体そのものが持っている生命エネルギーであると思っています。しかし、ここでは石川先生は命というものは周りの人々とのつながり（交わり）の中にあると言います。つまり命とは「交わり」なのです。重症児は自分で生命を維持することはできません。その子の生命は、その子に関わろうとする者たちによって維持されるのです。それは実は大人でも同じなのです。

●北海道の「べてるの家」のある女性はいつも自死願望がありました。彼女は睡眠剤をがぶ飲みして救急車で病院に運ばれて入院すると、不思議とその願望は消えるのでした。そんなことを何度も繰り返している内に、何でそうなるのかを研究しました。すると、彼女は寂しくなると自殺未遂をし、病院に運ばれ、病院で優しくされると癒されて帰って来ることが分かりました。救急車で運ばれている内に心が安心し、病室ではもう平気になるのです。そうすると家に帰らなければならないので、わざと病気のふりをします。そこで睡眠剤を飲んで病院に運ばれるという表現ではなく、自分の口で仲間に「寂しい、仲間が欲しい」と言うことにしました。それからはそのような異常行動はなくなったそうです。

交わりを失うと人は自死するのです。若者たちはSNSに交わりを求めます。そこが居場所にならないと自死する人もいます。このように命とは神と人との交わりなのです。重度の障害児の命は、その子に関わろうとする者によって維持されます。同じように私たちの命は、私に関わろうとする神によって維持されているのです。神は私たちとのつながりを切ろうとはなさいません。あなたが生きることを願い、その思いがなくなることは決してありません。なぜなら神は完全な愛であり、あなたを創造された親だからです。復活とはこの親である神との交わりなのです。この世でキリストと交わる者は既に復活が始まっており、来世で完成します。そして、この交わりは永遠の交わりです。だから私たちは死なないのです。

キリスト教が始まったのは人間の力ではありません。弟子たちは恐れで何もできませんでした。それが死の力です。死は人を恐怖で縛り、硬直させ、屈ませます。そこに命が入って来たのです。命に触れられた弟子たちは、恐れが消え、力が湧き、立ち上がったのです。これがキリスト教のすごさです。キリストが復活したように復活するのです。だからゼロになっても、マイナスでも大丈夫です。トマスのようにキリストに触れなさい。そうしたら信仰と命が始まります。キリストに触れられたら必ず何かが始まります。彼は創造者であり、無から有を生み出す方だからです。この教会がそうでした。誰もいなくても、キリストとの交わりで

ある祈禱を始めたのです。そうしたら喜びと命が入って来て、動き出したのです。どうか命を与えるキリストとの交わりを大切に、期待し、それを続けて下さいますように。それこそあなたの復活なのです。栄光が命の創始者であるキリストにありますように。